

# 瀬戸内 三十三観音霊場巡りの記

大土井 田中 修

六十年三月開始された瀬戸内三十三観音霊場巡りの第一回が去る五月十三日に行われた。

今回の巡拝は、岡山市竹原の馬路山明王寺、岡山市国富の瓶井山安住院、玉野市日比の与楽山観音院、倉敷市連島の矢上山宝島寺、金光町占見の西谷山泉勝院の六ヶ寺、倉敷市玉島沙美海岸の矢崎山本勝院の六ヶ寺を、概ね予定通りに行動、午後六時頃には帰着出来たが、途中鷺羽山での瀬戸大橋工事展望は巡路と時間の都合で取り止めねばならなかった。

巡拝の寺々、道中など私なりの印象を記させて頂くこととする。

明王寺は竹原から古都南へ越える峠の丘の上にある、新緑に彩られた美しい山腰にあり、寺苑、巡拝受入に設備等の整備が行われていた。

安住院は後楽園借景の操山多宝塔と溪をへだてた山ふもとにあり、古くから色づいた丹塗りの仁王門の寺々、古く登る溪沿いの道がすばらしく、寺の建物も閑雅平明の感じであった。岡山から南へ、児島湾に浮ぶ吉備の高島を眼下に、児島半島へ渡り、郡、八浜を駆



荒蕪を思わせるものは一ヶ寺もなく、御住職、檀徒の方々の並々ならぬお心遣いが感じられたことであった。拙い巡拝記を綴るに当たって、私に手配したの一点瀬戸内三十三観音霊場巡りの記の巡拝した六ヶ寺は無かったが、絵の描ける人の幸せをしみじみと思わせられた。

せいらいさ、かでも絵心があれば、少しはましな報告も書けたのではあるまいか、汗顔の次第である。

# 大峯登山

副任職 若松隆英

修験道、山伏の祖修行者の開いた山として知られ、また「のぞき」でも有名な大峯山に登る機会を得た。

かたくなに観光化をこぼみ、今も女人禁制を守る山である。

この大峯山に登ろうという計画が若い僧侶たちの間で練られているのを知り、以前から自身でも願望する所でもあったので積極的に一行に加わらせてもらった。

今の世はともかくも便利が尊ばれる世の中である。

山の上の寺も、岬のはしの寺も立派な道がつき車に乗ったままで寺にお参りできる。

それは寺と人々を近づけず今の霊場巡りブームを起したのと同じ。

寺へお参りする人が減少して、大きな寺をながめてまわるといふような人々が増加した。

寺に本来求めるものとは違った姿になっただけの事もある。

人は自ら進んで汗し、あえて苦難に挑んで肌で体験したあとにこそ胸中に湧き出る充足感を感じるものである。

信仰の喜びを得るのもまたこのようなのであらう。

九月三日、午前八時半、岡山駅に集合、計十名新幹線に乗り、新大阪下車、地下鉄で阿倍野まで行く。

乗りつぎの電車の時間待ちで駅外へ

出てみると陸橋に「アフリカ難民救済」ののぼりを持った托鉢僧、首からかけた頭陀袋には高野山と書かれていた。

あじろ傘をかぶっているが、まだまだ強い日射し、傘の中の顔はこちらとこちらを向けて、募金に協力した。

人通りの多い中、一人でいるのもなかなか勇気のいることだ。

近鉄特急に乗る、吉野に向かう。

同年令の僧侶ばかり、興味関心はだれも同じ、話のつきることはない。

終点吉野に着き下車、ロープウェイで山上へ、店の並んだ門前町を通りぬけると、眼前に見上げるばかりの建物、蔵王堂である。

法隆寺と同様昭和の大修理を終へ、今は落慶法要を待つばかりである。

境内には南朝行在所跡の碑、楼で有名な吉野も政治のうずまきこまれたこともあった。

門前の食堂に入りざるそばを食べ、しばし休憩の後、いよいよ大峯山にむかって出発。

交通の便がわるく、タクシーをチャーターし三台に分乗して約四十分、洞川に到着。

大峯山に登る者年間約七万人、その多くの者が、ここを基地とし、宿をとる、ということから昔から行者の宿の宿が発達している。

その中の一軒、西村屋に入る。

年輪を感じさせる庭、さすが行者宿だなあと考えたのは、広い仏間に立巡りな仏壇が祭られていたことだ。

明日はこの主人が登山の先達をしてくれることだ。

まだ陽も高く夕食までには時間があるので一km程はなれた所にある鐘乳洞に行ってみることにする。

さすが中は涼しい、道中の疲れもふっとんでしまった。

みんな欲が出、さらに一kmほど離れた所にある吊橋まで行ってみることにする。

杉のそびえ立つ山道の中を歩いていると、宿を出る時かあやしかった空が見るまに黒々と降り、雷鳴がどろどろきだした。

数をたのみに進むも進んで行つたが大きな雨がポツリ、ポツリ、みんなふもとへ降りる道をさがして一目散にかげおりました。

見るまにドシャ降りになったが、幸い龍泉寺にたどりつき、建物のかげで雨やどんで、だが山に降り残された木の下のあたりで、雨の音もいり、無気味な事かぎりない。

山の上の一面を見せつけられた思いがたか。

明日の登山のことが頭にうかぶ身がひきしまる感じがした。

ほどなく雨もやみ宿に帰り、風呂に入り夕食をとる。

精進料理に酒という組み合わせで酒は誰もすすまない。

翌朝、仏間でお勤めをし宿前で記念写真を撮る。マイクロボスで約2km、大橋に

到着。

ここが登山の起点となる。

ここからは自分の足だけがたたり。女人結界と書かれた碑が立っている。道は思ったほど急ではない、先達である宿の主人は、淡々としたりずムで歩く。

皆んなもまだ余裕があつて笑い声も聞こえる。

まわりは杉、ひのきの美林、よく手入れがされていり、茶屋に到着した。地元の人々が飲み物などを売っているのがある、今は休店中。

しばし休憩の後出発。

しばし道が険しくなり弱音をほくする者も出る。先達さんから大きく遅れる者も出る。

宿を出る時金剛杖を求めてきたが、先達さんが時には日に二往復することもあるそう。

年は我々よりずっと上だが、日頃あまり足を使わない我々と違って身が軽い。視界がだんだん開け、谷が段々深くなる。

また一時間次の茶屋に到着した。下では一本百円のかんじゅうスガここでは三百円、高いなあと思いがらもの乾きにはかたず一本求める。いっしょに飲みます、おいし。

さあ、あとは頂上までいっしょに、岩が地肌をあらかわす所が多くなり、木もそう大きなない。

金剛杖の役立たない所が多い。

岩肌は木の階段が作られ、登りやすくなっている場所もあるが、鎖が下つていてそれを頼りに登るところ、さらにも鎖もなく先達さんの指示に従って、そのこぼり右を右手で持つて、右足をそのこぼりに入れて、と、というように格好で順次登っていくところもある。

下を見ればまっかさま、ソツとするでも皆んななにか無事に難所を通りぬけ平たるところに出た。

高さ千七百二十mの頂上まであとわずか、ホツと息する。

しかし、ここに大峯山一の名所が待ちかまえていた。

高さ二百二十mの岩の絶壁、その上は多少前方に傾斜しながら平らである。

ここから上半身を乗りだして絶壁の下に祭られている祠を拝むのだという。ロープがあつて輪が二つ作られてあり、これを腕におし肩にかけ寝そべる、さらに先達さんが足首を持って身を絶壁に押し出した引っぱり上げたりする。

なかなか自分から先にやろうとする者がいない。

人がやっているのを見たいとした事でもなさそうに見えるが、いざ自分下つてみると大違い、手をあわして下の祠を拝むという手が合わない。

スーと下にひきこまれそうなのが、本心から我々には言わなかったが、本来ならここで先達さんが、親孝行するか？とか叫ぶのだという。

「はい、します」と言わなければ、段々身体を前に押し出すのだそうだ。人間必死の時にかけられた言葉は骨の髄まで響く、この「のぞき」の効能は大きなのがある。

## 人生の折返し点に立って 思うこと

下寺 山本佐与子

来春には主人も百年退職、そして私も数えて六十、老後云々とはまだ先のことと追って参りましたのに、いよゝ目前に思つて参りました、なんとも心の中に揺れ動くものを感じるこの頃でございます。しかし、やりたい事は山程有るし、これからの楽しみだと思つて主人、三十余年手足まといになりつ、共に歩んでまいりました私、この先せめて心の若さは失わず、明るく豊に生きて行き度いと思つております。老齡化社会となりさされる昨今、私共の前途も決して明るいものではないかも知れません。これからの世の中、子供を頼りの老後など到底のぞめぬという声を耳にします。悲しい事ながらそれを現実としてみたい。私共にも頼り度くとも頼れる子供を持ちません。自分の力で生きて行き、誰か様かの手を借りずすすす、折角この世に生を受けた、それを喜びとして勢いづいていきたいと思います。

家でわが子を教育する事はなかった主人も、職場での三十年間、沢山の他人様の子供をお預りし、暴力だ、いじめだと騒がれる中、無事に今日まで勤めさせて戴き本心に幸でございました。これから先、二人きりの生活になった時、子供達が気軽に遊びに来てくれ、若い人が相談事をもち込み、傍、昔話に耳をかたむけ、老人達がお茶の一つも飲みながら愚痴まじりの世間話等、語合うそんな暮しの場になればと願っております。しかしそれを期待するに

## 総代会役員名簿

(◎総代長 ○副総代長)

庄田 ○森下繁 三浦敏幸  
高助 岩田真  
渡内 千種可郎

順次かわつてやつたが最後までこぼれも上り。頂上に到着、ちよと本堂は解体修理中、横につくられた仮本堂で心経一卷をあげる。

息がはずみながら、ついに来た、やつと来た、自分の足で来たんだという気持ちをこめて、精一杯拝んだ。

先年、今解体修理中の本堂下から、二体の金の仏像が出てきた。

平安時代のものか、貴族が奉納したものか、それは藤原道長の可能性もあるというふうな事が新聞にのつていた。

もし、本人自身がやつて来たのだらう、というふうな事に納得したのだらう。その人はきつとこれほど願ひもかならず成就する事を確信したことだろう。また同時にどんな困難も克服してやりとげる決意をこの時した事だろう。ちよと頂上で宿で一緒だった人とすげ傘をかぶり白装束に身をつつん出くわした。

先達さんに聞くとも何日も登り続けているという。

心に期するものはどんなことなのだろう。頂上で食べるにぎりめしはおいしい。宿で作ってくれたものだが、その心ずくしが身にしみ。

## 朝日寺墓苑完成

近年、墓地の不自由をうったえられ人がふえ、朝日寺においてもさういふ方々の願いに答えるべく墓地を造成いたしました。

寺から百メートルで菩提寺を至近に見渡せる好地です。

又、車で墓地への乗り入れも可能です。

## 密教婦人会役員名簿

(◎会長 ○副会長 △会計)

庄田 有本小夜子 松本富子  
渡内 浅尾美佐恵  
大土井 尾玉菊枝 橋本安子  
西部 坂上郡 釜井多美子  
市場 井前幸子 谷まさ子  
中東 水野幸子 △藤岡花子  
大東 心光速子 長寿初枝  
数井 川野光子 川野君子  
下寺 山本八重野 山本松香  
山口 山本千和  
前泊 武内笑子  
尾張 内田照子  
尾張 田淵里津子 八塚よね

## 十三仏巡り

五、地藏菩薩  
字が示すように、もともとは地の蔵。大地の恵み、豊作を表わす仏さんです。

土と緑の深かった私たちの先祖にとつてはもっとも親しい仏さんとして、お地藏さんと呼んで参りました。

左手に持たれたる宝珠はすべての願いをかため、右手の賜杖はすべてのところにもとんでやつて来てくれる事を表わしています。

お地藏さんに対する信仰は発展して従来の安全を保障してくる交通安全の仏さんとして、子育ての仏さんとして、特に最近はお水子地藏さんとして信仰を集めています。

六、弥勒菩薩  
私たちが今、しんどくともそれに耐えて生きていけるは、将来への夢があるからです。

夢のない人生は殺伐としています。この夢を表わす仏さんが弥勒菩薩さんです。

弥勒さんは兜卒天という世界におられ、五十六億七千万の後、この世に降りて来られています。

信じて来られています。

古来、偉い坊さんが出るとあの人は弥勒さんの生まれ変わりだと言われてきました。

お大師さまも弥勒菩薩と一緒に再びこの世にあらわれて人々を救うと誓願されています。

霊場巡りをする時に使うおさめ札の表に書かれている種子は弥勒さんを表わすものです。